岐阜新聞真学塾

出題　螢雪ゼミナール　大垣駅前校・築樋拓真

問題【国語】

今回は論語がテーマです。

問１　次の文の下線部を漢字に直しましょう。

彼は幼いころからおやふこうを重ねてきた。

問２　次の言葉は論語の一節を書き下したものです。（　）に当てはまる言葉を入れましょう。

（１）四十にして（　）ず。

（２）子曰く、故きを（　）新しきを知れば、以て師為るべし。

豆知識 雑学コラム　日本語に根付く孔子の教え

論語は紀元前500年ごろに活躍していた思想家の孔子の教えをまとめたものです。約2500年前は、日本の時代区分でいうと縄文時代から弥生時代にかけての時代です。それだけ古いと今の生活と関係が薄いように感じてしまいますが、孔子の教えは今も日本語の中に根付いています。今回は孔子と論語についてみていきましょう。

まず、孔子の生きた時代についてみていきましょう。孔子が生きていた時代は春秋戦国時代と呼ばれた戦乱の時代でした。漫画の「キングダム」の舞台になっている時代だといった方が中高生にはイメージしやすいかもしれません。戦乱の時代の中で、どうすれば国をうまく治めることができるのかという理想を主張する人たちが出てきました。こうした人たちを諸子百家といい、孔子はこの諸子百家のうちの一人です。

次に、孔子が唱えた考えはどのようなものだったかをみていきましょう。孔子の考えの基本に「孝」というものがあります。「孝」とは、親のことを大切にして、尽くすことを指す言葉です。「親孝行」は親に対して「孝」を行うこと、「親不孝」とは親に対して「孝」をしないことと聞けば、イメージしやすいのではないでしょうか。「親孝行」や「親不孝」が、実は孔子の教えが元になっていると知ると身近なところにいきているんだと感じますよね。

「親孝行」や「親不孝」以外にも孔子の考えがいかされている言葉があります。今回の問２の(1)は「四十にして惑わず。」が正解ですね。これは孔子が自分の人生を振り返ったときに「40歳になり、自分の生き方に迷うことがなく確信を持てるようになった」と言ったことが元になっています。この論語が40歳のことを「不惑」と呼ぶ由来になりました。

同じ一節から生まれた言葉には、15歳で学問を志したことから「志学」。30歳で自分の考えに自信をもって自立したことから「而立」。50歳に自分の使命を知ったことから「知命」。60歳で相手の言葉を素直に聞けるようになったことから「耳順」。70歳で自分の心の赴くまま行動しても間違ったことをしなくなったことから「従心」があります。

また、(2)は「子曰く、故(ふる)きを温(たず)ねて新しきを知れば、以て師為るべし。」です。これも、前に学んだことや昔の事柄をもう一度調べたり考えたりして、新たな道理や知識を見い出し自分のものとすることを指す「温故知新」という言葉のもととなった一節ですね。書物からの知識はあるものの実践できてない人を「論語読みの論語知らず」と言います。しかし、「親孝行」や「温故知新」のように実際には論語が由来と知らずに、日常で実践できていることも多いようですね。

【解答】

問１　親不孝　　問２（１）四十にして（惑わ）ず。

（２）子曰く、故きを（温ねて）新しきを知れば、以て師為るべし。